

令和4年度元気な中山間地域づくりセミナー 要旨

日時：令和5年2月6日（月）13:30～15:40
場所：パレブラン高志会館 カルチャーホール
内容：基調講演 あわすのスキー場 支配人 松井 一洋 氏
事例発表 NPO法人こば 事務局長 平沢 義孝 氏
土山自治会 青木 力 氏
富山県農林水産部農村振興課
講評 富山大学 名誉教授 酒井 富夫 氏

1 基調講演

(1) 「人生をかけてこの場所を守る

～スキー場再興への思い・実践・未来への展望～

あわすのスキー場 支配人 松井 一洋 氏

- あわすのスキー場は1960年にオープン。2002年、地元有志を中心に発足しましたNPOあわすのが今日までスキー場の運営を引き継いでおります。
- 2020年、解散の動きがスタートした時期というのは、私自身およそ4年半、東京で仕事をし、土日は富山で活動し、年間約50往復、当時はしておりました。
- 解散報道があった翌週、インタビューを受けることになり、感謝を込めた草刈り、ごみ拾い。何せ集まってくれみたいなことを新聞で言ったんです。蓋を開けましたら、天気も悪かったのに、数えること200人超。「誰か口火切ってくれるが待った」「一緒にやってくうまいけ」と言うてくれた人も。
- 仲間たちが提案してくれた支援する会の立ち上げ、これによって多くの方々の気持ちを確認することができたわけです。そのとき、私は勝手に何かうまいこといくがないかなと、勝手な妄想でしたけども、勝機が見えた瞬間でした。
- 初年度、オープンの前の前の日ぐらいに大雪が降りまして、幸先のよいスタート。
- 昨シーズン、2年目ですけども、オリンピックイヤーということもあって過去15年間で最高の人の入り込み。ところが、物価高ですとか、いろんなものが高騰しているということもあって、少しだけ赤字でした。
- 私の目標ですけども、約5年間で基盤を築きまして、お手伝いはしますけど若い世代に引き継ぎたいというのが私の理念であります。
- うちのスキー場は、富山県で唯一、行政が関与しない組織。この独立性は、事業継続の観点では私は最大の武器。属人化だとか依存に頼る運営手法では、長期間残すことは困難だと考えています。
- 新体制では、中小企業の経営者や各分野に精通した人材を理事メンバーとして招聘し、分業的に、横断的に課題に取り組んでいます。あとは顧客調査とスピード感、これを非常に重視した特徴のある運営をしております。
- 重要なのは人だなと思っております。やっぱり情熱って最低限必要で、その中で数字とか冷静な分析力とか調整力、これが加わることで組織の基礎が形成されると思っております。なるべく多くの人々の力、意見、お客さんでも従業員でも、これを取り入れる運営を心がけております。

- 最後ですね。私が人生をかけているのは、地域がスキー場を中心に発展すること。そのためには、スキー場がもうかることが必要。雇用を創出して、人口が増えることも必要。そこが目標です。
- 今、次の目標があって、1年を通じて公共交通であわすのスキー場へ訪れることができる場所にしていきたいと思っております。我々が住んでいる地域って車がないと生活できない地域。次のフェーズはそこだなと思っております。
- 少子高齢化は避けられません。地域の作業とか20年後できなくなることもあるだろうと。それをスキー場側、NPOが受託して多くの人でやっていけば、集落の維持もスムーズにいくんじゃないかなということを考えています。
- 皆さん、ぜひ会員になりませんかということで、今日の結びとさせていただきます。

2 事例発表

(1) 「集落の共同作業を支える農村サポーター」

NPO法人こぼ 事務局長 平沢 義孝 氏

- 私どものNPOが存在しております富山市小羽地区。中山間地に位置しており、江刈り、電気柵などは各集落で共同作業として行ってきたものです。
- ただし皆さん70過ぎの高齢の方がほとんどです。持続可能ではありません。そこで、農村サポーターの皆さんに協力をお願いするということになりました。
- 大変な作業をしていただくサポーターの皆さんに、去年、感謝祭をしました。集落の人たちは最初、ボランティアが来てくれるのかと懐疑的でしたけど、人が集まることによって集落の方も元気になっています。
- これからは、これまで集落単位で担ってきた共同作業を交流関係人口によって担っていくというふうに切り替えていく。
- 中山間地の大変な思いをしている人々が元気になれるよう、サポーターの方も来てよかったと楽しめる活動を今後も続けていきたいなと思っております。

(2) 「自然がでか〜いと！みんなで絆ぐなんとワクワクの郷DO！yama」

土山自治会 青木 力 氏

- 土山は、富山県では一番西の果て、石川県金沢市に面しております。
- 令和3年度から中山間地農業再生支援事業の取組でワーキンググループによる話合い、耕作放棄地解消と都市農村交流、この2つに的が絞られてきました。
- シャクナゲの花がらを摘み取ったら来年もよく花がつくということで、毎年3分の1ほどで精魂尽き果てるような状態が、サポーターの皆さんに来ていただいて作業しましたら、今年は全部作業をしていただいた。
- 今度はサツマイモの植付け。雑草の生い茂った荒廃農地です。このときもサポーターさんをお願いをして、1,000本の植付けをしていただきました。
- 相模女子大学の相生祭がありまして、収穫しましたサツマイモ、米、それからリンゴ、柿、栗、銀杏と、こういったものを持ち込みました。
- 高齢化が進むと独り住まいになり、健康を維持する食事に手が回らなくなると。おねえちゃん食堂がそういった面で活動できる部門として、将来的にできてくるんじゃないかと思っておるところでございます。

(3) 「とやま農業・農村サポーター活動支援事業について」

- 中山間地域では高齢化・過疎化が進み、集落活動の維持が困難となっております。こうした課題に対して、農山村地域でのボランティア活動を支援するとやま農業・農村サポーター活動支援事業が始まりました。
- 事業が始まったのは平成26年。富山市山田鎌倉で、大学生が住民と一緒に農業用水の江ざらいを実施しました。
- サポーターが参加したいと思ったり、参加してみてまた来たいと思ってもらうには、受入地域の工夫も必要となってきます。
- 今後、新規参加者の獲得と、参加者にその地域のことを好きになってもらいたいと考えています。また、受入地域同士がお互いの活動に参加し合い、地域のいいところを反映し合っていける交流ができればいいなと思っています。

3 講評（富山大学 名誉教授 酒井 富夫 氏）

- 松井さんに最初に粟巣野のお話をさせていただきまして、要するに、関係人口を非常にうまく活用していると。また、地域外の人が集まる仕組みをつくっているんですね。それがまた大事と。
- 何が要だったかという、地域の課題、これを解決する事業化を目指したんですね。地域資源を維持する作業に、今、地域と協働でやっている部分も出てきているというお話でしたので、そこも非常に参考になるかなと思います。
- 小羽の場合は、交流関係人口によって共同作業をやる。要するに町の人たちにも来てもらって作業することを、NPOが窓口だということ。RMOの一つの役割としてそれが実現している感じでした。農業者はもちろん、非農家の方の参加も求めていく流れがありました。
- それから土山につきましても、大学との連携、そういう意味では一つの関係人口には違いないと思います。おねえちゃんグループは、恐らくこれからの健康のことも考えたらぜひ必要だなと確かに思いました。要するに生活面ですよ。
- 今日のお話の共通した点は、基本的には地域運営組織、RMO的な機能をつくりながら中山間の場合はどうしてもやっぱり農の部分もある程度含めて考える必要があるというのをよく示唆されておったように思います。